

新年おめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

今年は曜日の関係で、12月28日の土曜日からですと9連休になりましたので、皆さんもゆっくり新年の休みを過ごされたと思います。去年は、元日に能登半島地震が来て大変驚かされましたが、今年は幸い大きな災害もなく静かに新年を迎えることができました。本日からまた新たな気持ちで仕事に取り組んでいきましょう。

一方で世界の状況を見ると、残念ながら不安定化の要素が多く、今後の世界に強い不安を感じる場所です。ロシアのウクライナ侵攻はもうすぐ3年となりますが、残念ながら東部はロシアに押し寄せ、膠着状況になっています。イスラエルの戦争も1年以上となり、いまだに一部のイスラエル人の人質が解放されない中で、イスラエル側の強硬な攻撃が続き、パレスチナ側の犠牲が増え続けています。アメリカではトランプ大統領が再選され、アメリカ第一主義を掲げた政策が実行されようとしています。ヨーロッパの極右勢力も不安定要因です。これらの政治状況を見ていると、第2次世界大戦の反省の上に立った平和の理念が後退し、力による支配という100年前の世界に戻ったような印象さえ受けます。しかし大学としては、やはり平和の理念を大切にするとともに、現在の状況の社会経済的な背景を冷静に分析し、それらを学生に伝えていくことが重要であると考えます。

このような不安定な世界ですが、コロナが収束し、日本には多くの外国人がインバウンドとして来訪しています。その一つの理由は日本が安全で平和なことだと思います。このように考えると、安全や平和は、大きな価値あるいは財産であり、これらを大切にしていきたいと思います。

さて、国立大学や滋賀大学をめぐる状況について考えてみますと、国立大学全体として今後の少子化の中で役割の再検討が始まっています。昨年生まれた子供の数は70万人を切り、これらの子供が18歳になる頃には、大学の再編成は避けられないと思われます。各大学とも18年後に向けて長期的な視点からそれぞれの特徴や強みを明確化し、生き残りを図っていくことが求められています。一方で国立大学全体としては、社会の中での国立大学の重要性をさまざまな観点から訴え、説得していくことが必要です。

滋賀大学の足元の活動については、地域中核施設整備事業および高度情報専門人材事業が始動しました。また経営分析学専攻も順調にスタートしました。我々としては今後に向かって十分大きなチャンスをつかんだと思います。

一方で、文部科学省や政府に頼らない姿勢も重要です。文部科学省のさまざまな事業への申請は進めるものの、民間からの資金獲得を増やす必要があります。自助努力をしているところに公的なサポートも来る構造があります。民間資金の獲得にはリスクはありますが、攻めの姿勢で行きたいと考えています。

教育面では、データサイエンスを横串しに全学教育を進めます。その中でリベラルアーツ・STEAM教育、アントレプレナー教育も重要です。特にデータサイエンス×アートの重視は、今後の滋賀大学の一つの戦略になると考えています。

今年は教育学部・附属小学校150周年です。こちらも大学の行事として成功させたいと思います。教育学部、さらには附属学校をアピールする機会なので、関係者の尽力を期待します。

事務のDX化の加速も進めたい。去年も同様のことを言いましたが、より具体的な成果を出す必要があります。大学の仕事を合理化し、生まれた余裕により外向きの業務に取り組み、職員が多様な経験をできるようにしたいと考えています。

最後にコンプライアンス関係ですが、セキュリティー関係、研究倫理など十分注意して進めていただきたいと思います。

いろいろとお話ししましたが、今年も力をあわせて滋賀大学を発展させていきましょう。